

祭祀空間と交通路

— 相模国北西部「鎌倉古道」の「三角辻」をめぐる —

松 本 司

- I. はじめに—辻・衢の形
- II. 研究フィールドと対象
- III. 近世史料にみえる境界祭祀空間としての三角辻
- IV. 三角辻の場所の特色と祭祀の有無
- V. 古道のプランと三角辻—方位軸を中心に
- VI. 「袴の形」をした三角辻—本線と支線
- VII. 今後の課題と展望—むすびに代えて

I. はじめに—辻・衢の形

近年、辻という場所の特質について民俗学的な関心が高まっているように思われる。

豊富な資料から辻の本質を明らかにしようとした笹本正治氏は、葬儀や辻切などの祭祀に着目して、村の中心において道が交差する辻と、必ずしも道の交叉点となっていない村の境・出入り口の二つが、人々に特に意識されていた辻であると考えた。そして、前者は垂直的他界観に基づく人間界と天界・地界との境界・出入り口であり、後者は水平的他界観にもとづいた境界・出入り口だと解釈して、異界との境界領域である点に辻の本質を見た¹⁾。この場合、辻は可視的な人間界の道と異界からの不可視の道が交叉する場ということになる。

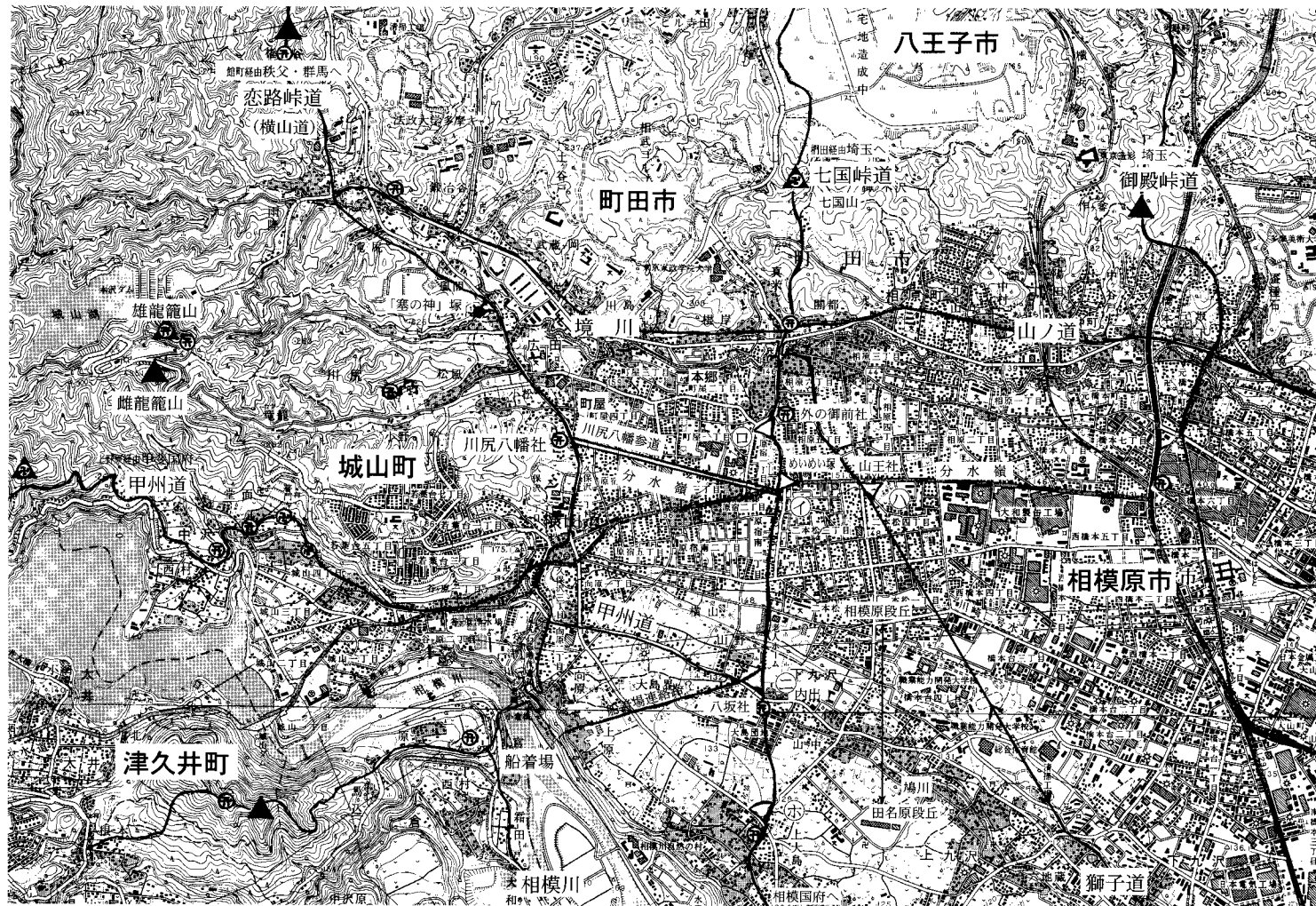
これに対し福田アジオ氏は、村の中心と村境の辻という二つの類型の抽出は間違いない

としながらも、「そこが他界との接点という解釈は多くの人々が採用する手順であるが、それにはもう少し論証が必要であるし、歴史的に形成されてきた多様なツジのあり方を把握するための装置としては短絡的すぎるように思われる」と批判している²⁾。

両説のいずれに与するとしても、辻という場所が祭祀と深く関わり、ある種の境界性が備わった場所であることは疑いない。しかし、意外なことに、「辻・衢とはどこか、どんな形状を成して道が交叉する場所なのか」という基本的な問いには明確な答えが与えられていないのである。果たしてそれは無用の問いなのだろうか。

辻という国字の字源は、道が十字に交叉する地点ということにある。しかし、辻と呼ばれるものには三叉路もあれば五叉路もある。また、辻が単に点ではなく、一定の面積をもった空間であることは、辻売り、辻相撲などの言葉が教えている。さしあたり、「複数の道の交叉するところ」と理解することには異議が出ないと思われる辻であるが、しかし、民俗語彙に示された辻の辞書の解説を検討した福田氏は、「ツジとはどこかについては読者の常識的解釈に任せてしまって」いて、「ツジウリやツジクレをする地点が本当に道路の交差点であるかどうかは確認できない」と指摘している³⁾。

キーワード：辻、衢、三叉路、祭祀空間



(国土地理院 25000 分 1 地形図「八王子」,「上溝」)

0 500 1000 1500m

図 1 鎌倉古道と三角辻

辻の古代的表现であると考えられている衢に関する研究においても、状況はあまり変わらない。白石太一郎氏、前田晴人氏らによって進められてきた都城制段階以前の奈良盆地の軽衢や海石榴市衢などに関する研究においては、「広場的な空間」⁴⁾、「道が何らかの形状をなして交叉・分岐するところ」⁵⁾という指摘はあるが、市・歌垣・相撲・刑罰執行・政治的儀礼などが行なわれた衢がどんな形のどんな場所なのかは検討の対象になっていない。また、木下良氏によって律令国家段階の国府の「十字の街」が問題にされた際も、出雲国風土記卷末記が「十字の」と断るからにはそれ以外のものも意識されていたはずなのに、「十字の街」が方格子割を基調とする地域計画に果たした役割を説く論旨には必要でないこともあってか言及されていない⁶⁾。

そんな中であって、古代史の関和彦氏は、閻魔大王の「閻」が「ちまた」の意であることに着目して日本霊異記下巻第22話、23話ほかを読み解き、閻魔大王の宮がある長方形の衢から、死者が進むべき前方に三本の道が延びているように空間図を復元している⁷⁾。しかし、厳密に考えると「三つの衢」と表現された空間を長方形に復元してよいかどうかは疑問が残る。

筆者は、数年来のフィールド・ワークで、起源が中世以前に遡る可能性をもった各地の著名な「辻」の中に、三叉路の交叉点とそれに付属する三角形の小空間△(以下、「三角辻」と表現する)があることに注目してきた⁸⁾。というのは、古事記神代巻のいわゆるイザナキ大神の禊祓説話に、衢に関連する「次、於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神。(中略)次、於投棄御禪所成神名、道侯神。」の記事があるからである。これは帯を延ばしたような直線道に禪のような形をした衢が接続する古代道の様子を表現したものであるが、この記事を本居宣長は古事記伝のなかで、「本は袴も禪もただ波加麻なるべし、(中略)さて袴の

股の分かれたる所衢の如し」⁹⁾と解釈している。「袴の股の分かれた」ような形をした衢とは、まさに三叉路の交叉点のことではないだろうか。

本稿では、「又」の字を連想させるこうした三角辻が、辻・衢の一つの本源的な形を示すものではないか、という作業仮説に基づいて、相模国北西部における三角辻の場所と祭祀との関わり、さらには古代の直線古道との関連などの検証を試みたい。

Ⅱ. 研究フィールドと対象

本地域は、武蔵と相模の境界地域であり多摩丘陵(玉の横山)の扇の要に当たる神奈川県津久井郡城山町の龍籠山^{たつこやま}を基点に、北側を多摩丘陵と境川、南東側を丹沢山塊と相模川に挟まれて扇状をなす、相模野台地の北西地域とその周辺である。現在の行政区分では、西部は神奈川県津久井郡城山町、東部は相模原市に含まれ、境川を挟んで北側は東京都町田市と接する。後北条時代の『小田原衆所領役帳(永禄二年・1559年)によって相模国分を示せば、西部は「川尻村」、東部は「栗飯原^{あいはら}四か村」と一括される上相原村・小山村・下九沢村・橋本村になる。

ところで、本地域は、鎌倉との関りを伝承する道、あるいは中世武士団・横山党の人々が鎌倉に行く際にはほぼ確実に使ったと思われる道(本稿ではこれらをあわせて「鎌倉古道」と呼ぶ)の集結地となっており、近世絵図や旧版地形図でかなり正確にそのルートをたどることができる。

南北道は西より順に「恋路峠道(横山道)」、「七国峠道」、「御殿峠道」、東西道は境川沿いの「山ノ道」、相模川左岸の「甲州道」¹⁰⁾、そして両者の間にあって相模川側から北西に斜行する「獅子道」がある。この獅子道には、かつて小鶴ヶ岡八幡宮と呼ばれたことがあるという川尻八幡宮の祭に、暦応四年(1341年)

の刻みのある御神体をもつ相模原市上溝の亀ヶ池八幡宮から雌雄の獅子がやってきたという伝承がある¹¹⁾。この道も「鎌倉に通じる」と言われてきた道であったが、この獅子道の延長ルートと七国峠道が交叉する地点から1キロ余りの直線道をなす「川尻八幡参道」もまた、鎌倉と繋がっているとの伝承があった¹²⁾。なお、図2の通り、『神奈川の古代道』は、七国峠道の南北軸分を含む逆「く」の字の部分（現在の城山町と相模原市の行政界）を古代相模国の愛甲郡・高座郡界とする説があることを紹介しており、注目される¹³⁾。

ところで、これらの道のうち、図のほぼ中央にある極めて直線性の強い七国峠道をみると、南から北へ㊸、㊹、㊺、㊻の、ほぼ同じ面積をもつ三角辻の小空間が目に入る。また、「獅子道」にも同様の地形㊼が確認できる。

㊺については「風揚げ辻」の名で近辺の子どもたちの格好の遊び場になっていたという¹⁴⁾。点ではなく、一定の面積が必要な風揚げの場所が「辻」と呼ばれていたことになる。

次にこれら五つの三角辻が少なくとも江戸時代には存在したことを確認しておきたい。

図3の明治三十九年測図正式二万分一地形図には五つ全部の三角辻が確認できる。図4の明治十四年の地籍図集成図¹⁵⁾には㊺、㊻、㊼がみられる。個別の切図で地目を見ると㊺の「めいめい塚」と呼ばれる部分は「山林」、それ以外は「畑」になっている。㊻、㊼は全域が「畑」の表示になっている。

次に図5についてみる。本地域には「貞享元年（1684年）川尻村絵図」¹⁶⁾、「享保三年（1718年）改元治二年写相原村絵図」¹⁷⁾、「享保十三年（1728年）大島村絵図」¹⁸⁾の村境を接する三枚の絵図がある。これらの絵図から、㊺、㊻、㊼の全形が確認できる。また、㊹、㊸については畑になっていて一辺が確認出来ないが、その位置は確認できる。したがって、㊺、㊻、㊼などは享保年間以前に

は存在しており、さらに川尻村絵図に見える㊼は、貞享元年まで遡ることが確実であると考えられる。

Ⅲ. 近世史料にみえる境界祭祀空間としての三角辻

本地域の三角辻が決して偶然の産物ではなく、確かな意思・計画性にもとづいて設定された歴史的場所であることを証明するための前提として、まず当該地域の近世史料にみえる境界祭祀事例を紹介したい。近隣の小山村（現町田市小山町）に明和九年（1773年）の「疫病祭」と呼ばれる境界祭祀の様子を伝える「玉利軒日記」という記録がある¹⁹⁾。

一 明和九辰の六月廿三日疫病祭仕候、此節三つ目・久保谷戸・道谷戸三か村一同にて久保谷戸くつつ坂の上金右衛門山のふちのくう地江こしを納置申候、尤三拾年以前も道谷戸へ出候古れい有之候ニ付此所江出し申候、尤境道へ内也、是は三つ目へ道谷戸迄内緒祭りなり、大祭と申候は三給一同横土手へ上は壺所ニして、小山田ときわ境江こし納候事先規通り也、何れも壺軒ニ付拾六文あつめ也、乍然三つ目へ上ニ内緒祭の節少々つぬきいたしあら谷戸田端へ心さしあり此時毎ばんきつねなき候故山王大権現江六月二十一日ニゆ花上太々をきく、此時ほり向久左衛門家内不残やむなり

「内緒祭」で神輿を納め置いた「道より内」側の「空地」は、区画整理事業で失われたが、ほぼ現地比定可能である。小山村を構成する三つ目・久保谷戸・道谷戸の三つの部落の境が接する多摩丘陵の頂である²⁰⁾。

「大祭」で神輿を納め置いた場所も比定できている。小山村と小山田村の境である多摩丘陵の尾根の頂の三角辻で、もっとも高い位置になる一つの角に円形の塚が残っている。この場所へ南側から登って来る坂は「冥土

図2 高座郡・愛甲郡推定郡境
 (『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会より)

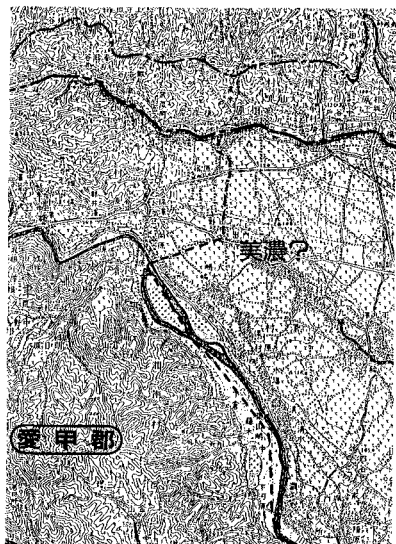


図5-① 貞享元年川尻村絵図(一部)

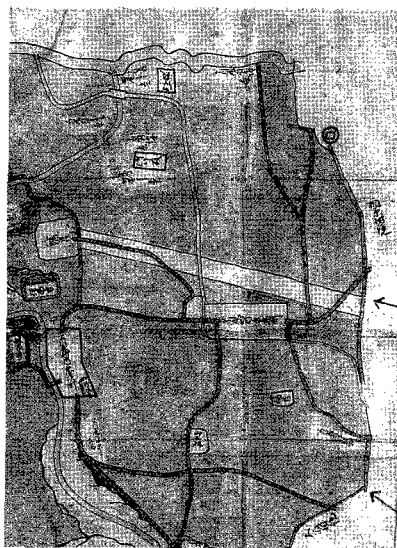


図5-② 享保三年改元治二年写相原村絵図(一部)

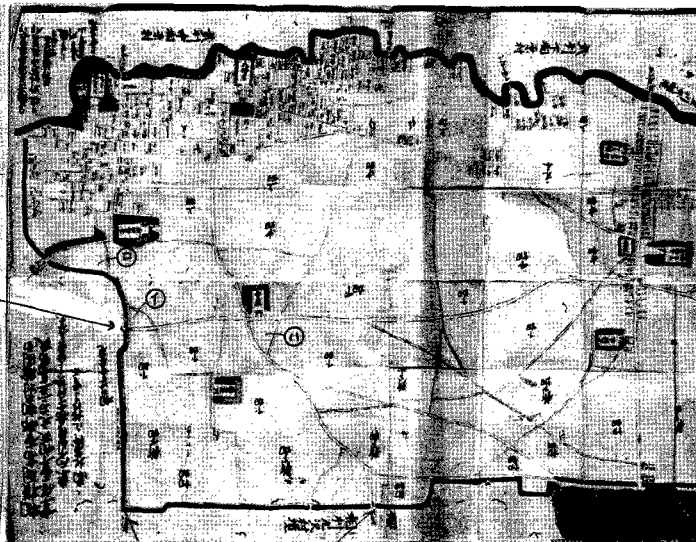


図3 正式二万分一地形図「上溝」(一部)

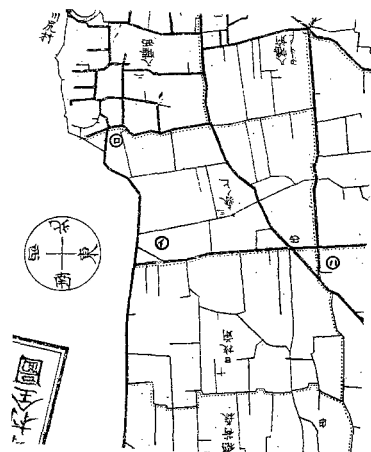


図4 地籍図集成図(明治十四年出版)

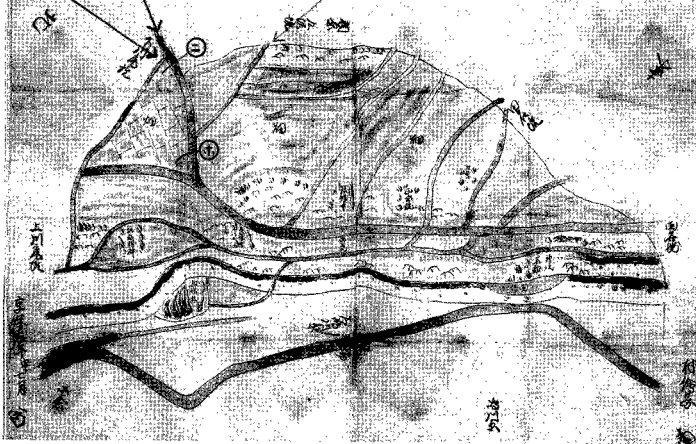


図5-③ 享保十三年大島村絵図

坂」，北側からの坂は「首切り坂」と呼ばれ，隣接して「牢場山」がある。

「くつう坂（地元民は「苦痛坂」の意だろうという）」，「冥土坂」，「首切り坂」の地名から，この事例でも，山頂の三角辻が異界との境界領域と意識されていたことはほぼ疑いない。ただ，冒頭で紹介した笹本氏の分析にやや機械的な面があるとすれば，「村の中心と境」，「垂直的他界観と水平的他界観」と区別したことに加えて，それぞれ「村の中心＝垂直的他界観」，「村境＝水平的他界観」と結合して理解した点ではないだろうか。というのは，大祭の行なわれる小山村と小山田村の「境」は山頂であり，これを水平的他界観で考えることはできないと思う。また，内緒祭の場合は，小山村の各村にとっては「境」だが，三村全体の祭祀空間としては「中心」である。特に，「中心と境」の区別は，いわば辻の両義性的解釈の範囲内に留まると解せよう。このあたりはさらなる論証が必要とされる点である²¹⁾。

IV. 三角辻の場所の特色と祭祀の有無

図1により，本地域の三角辻が位置する場所の特色を検討しながら祭祀の有無を検証し，人々がこれらを異界との境界領域としての辻と意識していたか否かを考えたい。

①は境川水系と相模川水系の分水嶺という地形の特異点に接続したごく緩やかな傾斜面に位置する。川尻村（西）と上相原村（東）の村境にあるが，上相原村側は水利が非常に悪く，江戸時代は家がほとんどなかったところである。「風揚げ辻」という地名を持ち，北端の分水嶺上に「30～40人ほどの武士が，持ってきた首を埋め，めいめい自分の行くべき先を決めた」との伝承の残る「めいめい塚」がある。昭和17，18年ごろまで円墳状の土盛りがあったという。この「めいめい」は，「まいまい井戸」があったからだとも伝わる。

また，この塚にはダイダラボッチ伝承がある²²⁾。この伝承は，村境の道に大きなワラジをぶら下げて邪霊の侵入を塞ぐ，各地の民俗事例に対応するものと思われ，狭義の境界祭祀の行われる辻であったと考えられる。川尻八幡直線参道東端付近の「大門」（慶長八年川尻村検地帳に見える）という地名地に接続する²³⁾。

②は境川の氾濫原に接続する段丘面に位置する。川尻村と上相原村の村境で，川尻村各地域への数本の集落道と七国峠道との交点に位置する。道を挟んだ東北側に馬頭観音，地藏菩薩のほか多数の庚申塔がみられる。これは辻が三戸^{さんし}の出入り口だと考えられていて，衢神・猿田彦を祀ったものだと民俗学では理解されている。相原村絵図を見ると，江戸時代にはこの場所付近に子易神社があった。『新編相模国風土記稿』によれば，この神社は「外ノ御前社」とも呼ばれ，七国峠道を約250メートル北上した地点の西約100メートルにあった「内ノ御前社」と対応関係にあったとも考えられる。また，この神社は大きな森の中心に位置していたという²⁴⁾。「花嫁行列が消えた場所」とか「花嫁行列は通ってはいけない場所」という伝承²⁵⁾や，「牛のひたい」（「牛のひたい」とは牛を屠殺するときの急所）という地名が存在することなどからも，通行者がこの三角辻を異界への入口として畏怖感を抱いていたことが伺われる。

この三角辻について注目されるのは，南北に直線性の強い七国峠道がここで西に大きく曲がっていて，これと接続する集落道の北・南に「本郷」・「町屋」という地名がみられることである。町屋地区内に残る「ついじ下」・「屋敷そえ」（いずれも慶長八年検地帳にみえる）などの地名も含めて，これらは近世・近代の本地域の景観とは違和感があり，中世以前に何らかの特別な施設が成立していた可能性を伺わせる。

③は相模原市の最高点である境川水系と

相模川水系の分水嶺に接続する南側のごく緩やかな斜面地に位置する。上相原村の時代には畑地域の真中にあり、村・部落などの境界性を持たない。道を隔てた北側にかつて鬱蒼とした森を持つ山王社があり、明治43年に杉・そろ・松等29本を切った記録があるという²⁶⁾。その後残った二本の松は、旅行く人のよい目印となり憩いの場となっていたという。山王社が置かれているのは、山岳信仰との関係が考えられるほか、この神の使いが猿であることから庚申塔と同様に衢神・猿田彦にかけたものである可能性があり、道に関わる祭祀の痕跡を見てよいかもしれない。

㊦は相模原段丘（高位段丘面）から田名原段丘（中位段丘面）に下りてすぐの鳩川湧出点付近に位置する。川尻村と大島村の村境にある。道を隔てた南側に近年まで八坂神社があり、その境内は「天王森」と呼ばれていた。天王（祇園）系の祭の中心は疫神送りであり、三角辻の南端に一番近い社地内に複数の庚申塔があったことから境界祭祀の行われる辻であったと考えてよいと思われる。

㊧は田名原段丘（中位段丘）から陽原段丘（低位段丘）へ高度を下げる直前の平地にあたる。大島村の畑の中にあり、村や部落の境界には位置しない。道を隔てた南側に、ここにもかつて山王社があった。

以上の検討から、

- (1)「風揚げ辻」や「牛のひたい」という地名が教える通り、本地域で「辻」と意識されていたのは本来、点ではなく、面積をもった三角辻のことだと考えられること、
- (2)三角辻の多くに、境界関連伝承や信仰の対象となっていたと思われる森・樹がみられること、
- (3)五つすべての三角辻に、祭祀の施設と思われるもの（イ、角地に円形の塚を築くもの、ロ、道を隔てた対面の角地に庚申塔等を置くもの、ハ、対面の角地にある

程度の面積を占めて山王社や八坂社等を設置するもの）があること、

が確認できた。したがって、本地域の鎌倉古道に見られる三角辻は、人々に境界性をもった辻と意識されていた可能性が高いと言えると思う。しかし、同時に次の疑問が生れる。

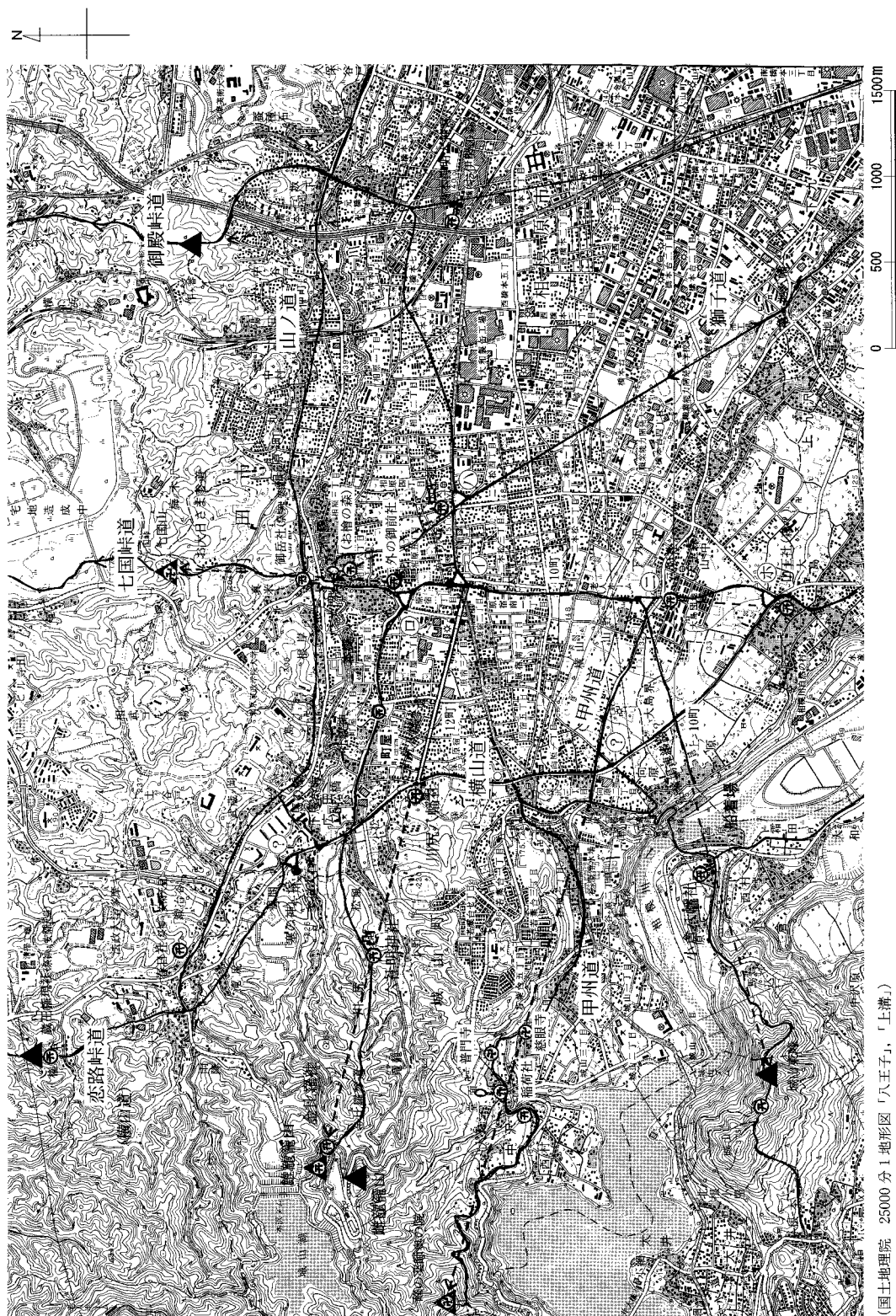
●三角辻には三つの角があるのに、一つの角にのみ塚等の祭祀施設があるのはなぜか。

この疑問に対する答の中に、不思議な形をした辻の本質が隠れているのかもしれない。そこで、辻が道に固有のものであり、その道とはそもそも、ある地点からある地点にできるだけ早く到達することに本来の目的があるという原点に立ち返って、三角辻の接続する直線性が極めて強い七国峠道ほかの古道がどのようなプラン、特に方位軸をもって設定されたと考えられるかを検討してみたい。地図を持って何度も現地に立ち検討した結果が図6である。なお、誌面の都合で掲載したのは小縮尺のものだが、実際は1万分の1や2,500分の1の地形図で検証してあることを特に断っておきたい。

V. 古道のプランと三角辻一方位軸を中心に

古代官道や中世軍事道のような計画道が、しばしば山を目標にしてまっすぐに設定されるのは特別なことではなく、航海における山あて術と同様に、空間移動における目指す方向と自らの位置の把握の必要性からすればむしろ自然だと考えられる。本地域のように龍籠山を基点にして、北部は多摩丘陵、南東部は丹沢山塊に挟まれた台地が海に向かって緩やかに高度を落とす地形では、横山道や甲州道の山間部を除けば特別な事情がない限り、この原理は道の設定の際に当然のものとして採用されると思われる。この点を念頭において考えよう。

まず、七国峠道については、㊦の西角か



(国土地理院 25000 分 1 地形図「八王子」、「上清」)

図6 鎌倉古道の築造プランと三角辻

ら北方の七国山を見通し、その軸線上に㊦と㊧をつないで方位軸が設定されていると考えられる。[▲七国山 𠂔お大日さま～お大日さま参道～○御岳社～][二国橋～△㊨～●めいめい塚△㊩＝直線道＝△㊦・○八坂社 𠂔天王森～△㊪]という道で結ばれた位置関係を計画方位の軸線が貫いていると考えられる。見通す起点とする三角辻が㊨でなければならなかったのは、この地点は七国峠道が中位段丘面(田名原段丘)から低位段丘面(陽原段丘)へ下り始める直前の平地にあり、これ以上南では北部への見通しがきかないことによると思われる。また、円墳状であったという㊩の「めいめい塚」は境川水系と相模川水系の分水嶺上にあることに意味があったのだろうと思われる。つまり、高度を下げていく、分水嶺の北側にルートを設定するためには、南北を同時に見通す最高点が必要とされたと考えられる。さらに、㊦北角と㊧南西角の距離はちょうど10町であり、三角辻が計画道の距離の設定にも関わることがある可能性を示しており、注目される。

川尻八幡直線参道については、図5の川尻村絵図と相原村絵図の接合関係から、本来は幅が30数メートルあったと考えられ、「大門」という地名の残る東端の上部の角は㊧の南角に直接接続していたと思われる。この道は、「大門」地名地の南端より、雄龍籠山を見通して方位軸が設定されていると考えられる。[▲雄龍籠山○金毘羅社奥宮～○金毘羅社～金毘羅社参道～○六社明神～○川尻八幡社：二の鳥居＝直線参道＝一の鳥居＝「大門」]という道で結ばれた位置関係を計画方位の軸線が貫いていると考えられる。「大門」東端(七国峠道との交点)までの参道の長さはちょうど12町、現在一の鳥居が立つ「相原境」までは10町である。

ただ、幅30数メートルもの道は人が日常的に使うためのものとは思われない。事実、貞享元年川尻村絵図の段階で道として描かれ

ているのは社殿に近い一部である。当初のものは一般人の参道と呼ぶよりも、京都上賀茂神社の一の鳥居に続く長大な社地や、下鴨神社の「糾の森」のような、神や神に仕える人々のためのものと考えたほうがよいと思われる。

また、この「参道」と、七国峠道および㊩とはあるいは築造の時期が違うかもしれない。なぜならゆるやかなカーブを描く本地域の他の事例と異なり、二つの道がT字状に交叉しているからである。ただし、参道は獅子道に接続する㊩付近までまっすぐに続いていたとの伝承があり、もしそうだとすると、この交叉点だけは十字形をした特別の意味を持つものだったことになる。いずれにしても、この直線参道については稿を改めて詳細な検討を行なう必要があると考えている。

川尻八幡参道と平行関係にあるのが相模川左岸甲州道である。この道は㊦の西角から峯の薬師奥の院ピークを見通して方位軸が設定されていると思われる。[▲𠂔峯の薬師奥の院ピーク～○稻荷社 𠂔巨樹(「全国巨樹・巨木材の会」が日本一と認定した根回り8.64メートルのウラジロガシ)～𠂔普門寺(藤原仏)～𠂔慈眼寺(廃)～「大門」～久保沢左岸端～△㊦]という道で結ばれた位置関係を方位軸が貫いていると考えられる。㊦西角から久保沢左岸端までの距離も川尻八幡直線参道と同じ12町である。

相模川の近世船着場方面を目指し、対岸で相模川右岸甲州道と接続する仮称「船着場連絡路」についても、㊦西角から城山東峰を見通して方位軸が設定されていると考えられる。[▲城山東峰～小倉八幡一の鳥居～①船着場～左岸段丘端＝直線道＝△㊦]という道で結ばれた位置関係を軸線が貫いていると考えられる。城山には複数のピークがあるが、そのうち東峰が選ばれたのは船着場の位置に規制されたからかもしれない。㊦の西端から船着場を見下ろす段丘端までの距離も㊦

北角～㊦南角と同じくちょうど10町であり、厳密な位置はこの距離で求められていると思われる。このような町単位の距離がいかなる歴史的空間によるものかが今後問題になる。

獅子道については、相模原市の最高点である㊦西角を目標にして、[「二国橋～〇「お檜の森」↑巨樹～〇山王社↑森・△㊦＝獅子道（上溝亀ヶ池八幡方面へ）]という道で結ばれた位置関係を方位軸が貫いていると考えられる。「お檜の森」には円墳状の塚が残るが、かつては相模国三本檜の中の本といわれる大木があって、村人は注連縄を張って崇めていたという。小さなお社にあったという御神体の丸石は現在も地元民宅で祭られている。図外になるが、軸線をさらに南東方向に延ばした相模原市上溝付近に六本の道が交叉する三角辻があり、ここが基点ではないかと思われる。

ここまでの検討で、㊦、㊧、㊨、㊩については直線性の強い古道の計画方位設定の基点となっている可能性が高いことが確認できた。問題は、南北路である七国峠道の道筋にありながら、その計画方位からは明確に西にずれた㊨の意味である。道のあり方と三角辻の角の位置からすれば、㊨西端から西に伸びる本郷～町屋間のルートが想定されるわけだが、現在の道はこれまでみた道と違い大きく蛇行している。しかし、㊨西端と町屋社救神、および本来の町屋地区の境界である町屋4丁目の北西端を結んでできる直線を軸線と考えると、これは、南に3町隔てて川尻八幡直線参道と、さらに南に10町隔てて甲州道と、正確に平行関係にある。慶長八年検地帳に「ついじ下」・「屋敷そえ」の地名が残る町屋地区付近は、町史編纂のための城山町教育委員会による遺物の散布確認調査の結果から考えて平安時代後期以降、長く本地域最大の集落地であり続けた地域である。川尻八幡参道東端に接続する㊩南西角が龍籠山を中心にした祭祀空間への入口の性格が強い

に対し、㊨西角は流通・経済活動などが行なわれる実際的な生活空間への入口の性格が強かったのかもしれない。㊨西端と本来の町屋地区の境界である町屋4丁目北西端との距離もほぼ10町である。

結局のところ、三角辻は、重要性に差があり得る三つの目的地を、起点・経由点・終点を意識して目指す計画道の基点として、地形の特異点付近に設定されたところに本来の意味があり、山に対する方位軸を持つ事例はその典型的なものだと考えられる²⁷⁾。

先に掲げた「三角辻には三つの角があるのに、一つの角にのみ塚等の祭祀施設があるのはなぜか」、という疑問については、おそらく中世以前に遡る計画道のルート設定のために、有意の地点が選ばれた結果だとひとまず答えられるのではないだろうか。どうやら「初めに祭祀ありき」ではなく、「初めに道ありき」ということになりそうである。

では、祭祀施設がルート設定のための有意の地点にあるとした点をさらに詳述することにより、三角辻に潜む固有の原理の一端を追求してみよう。

VI. 「袴の形」をした三角辻一本線と支線

三角辻に付属する塚・神社等や付近の巨樹の位置をみて気がつくのは、これらが特定の一本の古道の軸線上に並んでいるという規則性である。

例えば、七国峠道の場合、㊦の山王社、㊧の八坂社、㊨の「めいめい塚」、㊨の外ノ御前社は例外なく七国山を目指す軸線上にあって、この道が交叉する甲州道、川尻八幡参道、本郷・町屋への集落道等の軸線上には位置しない。また、㊩の山王社と、信仰の対象とされた巨樹が立っていた「お檜の森」塚の場合も、二国橋で七国峠道と交叉する斜行路の軸線上にあって川尻八幡参道に続く東西路の軸線には位置しない。㊧の八坂社や

㊦の山王社が、角からやや距離をおいた地点に位置するのも、これらの施設が三角辻に接続する特定の一本の道の軸線を構成する要素になることに重要な意味があることを示しているように思われる。

換言すると、三角辻に接続する道には本線と支線の区別があるように思われ、㊦・㊧・㊨・㊩・㊪に接続する道の場合は、あくまでも相模国府・鎌倉方面と埼玉（日高市）方面を結ぶ南北の七国峠道が本線だと考えられるのである。また、㊫に接続する道の場合は、「獅子道」という名前に引きずられて、川尻八幡参道に向かう西の道の本線と考えたくなるが、実際は「お檜の森」塚を経由して二国橋で七国峠道に合流する斜行路が本線だということになる。

以上の検討から、三角辻の特定の角に付属する塚・神社等の祭祀施設は、本来の計画道のルートを推定する標識となる可能性が高いと考えられるようになったわけだが、もちろん、重要性が同等である二つの本線が交叉する可能性はある。その場合、祭祀施設がどの位置に築造されるかという点も含め、今後さらに多くの事例を集めて、道の築造と祭祀空間の生成のプロセスとメカニズムを体系的に論じたいと考えている。

ともあれ、先に木下良氏の説を紹介したように、十字の街が「方格地割を基調とする律令的地域計画の基準点」となったのに対し、三角形の辻・衢は地形の制約に柔軟に対応したより古い段階の地域計画の基準点として誕生した可能性が高いのではないだろうか。

VII. 今後の課題と展望—むすびに代えて

最後に、今後の研究の課題・展望を、私自身の目指すところを含めて二点だけ述べておきたい。

第一は、このような三角形の辻・衢の発見とその原理の解明が、従来の古代・中世の歴

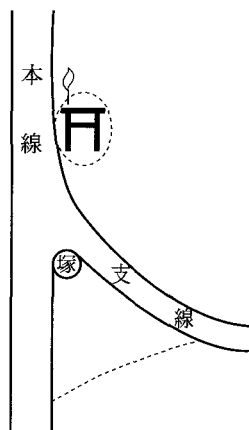


図7 三角辻の模式図

史的空間に関する研究にどう寄与するかということである。駅路・伝路のルートや接続関係の検証に役立つと思われることはいうまでもないが、ここで特に強調しておきたいのは、辻・衢の閉塞機能の議論との関係である。

衢論の現時点での到達点であると考えられる前田晴人氏の研究によれば、石上・海石榴市・軽・当麻の大和の四つの衢は個々ばらばらに存在するのではなく、四方から「<磐余宮>を宗教的に閉塞する目的をもって画定された単一にして不可分な衢の一群とみられ、後の都城制段階で「京城四隅」に規格化されていく衢の前提的な形姿」²⁸⁾ だという。また、垂水稔氏は前田氏の所説をふまえて中世以前の京都を例に、都市空間における多重の結界表現としての四角四界（境）祭などについて論を展開している²⁹⁾。ここで問題にされている衢が、その形に着目して正確に現地比定されれば研究は加速するのではないだろうか。実際、『吾妻鏡』に四角四界（境）祭が行なわれた記録がある鎌倉³⁰⁾にも、これに対応すると思われる三角辻が現在の道筋に確認されるのである。

私自身は各地の事例の研究と平行して本地域、つまり龍籠山を基点に、北側を多摩丘陵と境川、南東側を丹沢山塊と相模川に挟まれ

て扇状をなす相模野台地を、三角辻・二国橋・下馬の橋・「塞の神」塚・三つの「大門」などを配した四本の鎌倉古道で菱形に閉塞しているかのようにもみえる城山町付近に、いかなる歴史的空間が眠っているのかを解明したいと考えている。「ついじ下」地名の残る町屋地区に鎌倉の武家屋敷地区を連想させる方格地割が見えること、相模原段丘の最南端付近の畑地に条里のような地割が伺えること、相模原市教育委員会が2000年に発掘調査を行なった相原八幡前遺跡（相原4丁目176-1ほか）から馬を立たせた状態で葬った中世以前のものと思われる二列九基の大型土坑が発見されたことなど、気になることは多い。

第二は、私達人間の空間認識の根幹・全体性に関わる問題である。イーファー・ツァンは『空間の経験』の中で空間を神話的空間、実際の空間、抽象的・理論的・幾何学的空間の三つに分類した³¹⁾。本研究でおぼろげながら明らかになりつつあるのは、かつての社会に確かに存在して人々の生活と思想の質を支えた、三者相互の実際的なありようではないだろうか。

なぜなら、ツァンのいう神話的空間は、人間の側に立てばおおそ祭祀空間という言い方になるわけだが、本地域では、例えば七国峠道のように、祭祀空間としての社寺・参道等と実際の空間としての道が、抽象的・理論的・幾何学的空間認識である山を目標とした方位軸を芯にして恒常的にあぎなわれている例が複数確認された。かつて、この地の人々が辻に立って周りの山を仰ぐとき、地域空間は、道でつながった神話的で実際のな息づく全体性としてまっすぐに胸に飛び込んできたのではないだろうか。

全国各地にそれぞれの風土に対応した形で生き生きと存在した三つの空間認識の相互のありようを解明し、ささやかではあれ今日の地域づくりに新たな視点を提示していくことも、歴史地理学の課題であると思われる。

ともあれ、史料不足を嘆く声が聞こえる中であって、民俗学をふまえた歴史地理学による三角形の辻・衢に関する研究は、古代・中世都市論や祭祀空間論、そして広く空間認識論に新たな展開をもたらす可能性を秘めているものと思われる。

（國學院大・院）

【注】

- 1) 笹本正治『辻の世界-歴史民俗学的考察-』、名著出版、1991。
- 2) 福田アジオ「日本の村落空間と広場」、国立歴史民俗博物館研究報告第67集、1996、15頁。
- 3) 前掲2)、16頁。
- 4) 白石太一郎「古代の衢をめぐって」、国立歴史民俗博物館研究報告第67集、1996、138頁。
- 5) 前田晴人『日本古代の道と衢』、吉川弘文館、1996、3頁。
- 6) 木下 良「国府の「十字街」について」、歴史地理紀要第19巻、1977。
- 7) 関和彦「閻魔大王とちまた」、古代交通研究第8号、1998。
- 8) 奈良県櫻井市の「字陀が辻」や、「甲斐の三辻」と呼ばれるもののうち山梨県山梨市にあるものなど。
- 9) 『古事記伝』六、道俣神。
- 10) このほか（ホ）に接続する西側の道やその南の相模川沿いの道も、相模と甲斐を結ぶ道と意識されていたようである。
- 11) 安西 勝『望郷郷』第11号、2001に元治元年生れの天野音吉談としてのるほか、相模原市教育委員会編『相模原の地名-村をつないだ道・坂・川』は地図に現存する獅子道を表示して紹介している。
- 12) 現在でも鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の御神木の大イチョウに掛ける注連縄が毎年暮れに川尻八幡宮で作られるなど、本地域と鎌倉の関係を伺わせる史実・伝承がいくつかあるが、地元ではこの関係は戦後始まったものと理解されている。しかし、川尻八幡宮は江戸時代以前には「若宮八幡宮」の名称で呼ばれ

- ていたことがあり、本地域が中世武士団・横山党の勢力下にあったことも考慮すると両者の関係は古く遡る可能性がある。
- 13) 藤沢市教育委員会編『神奈川の古代道』, 1997。ただし、同書自身は「平地を主とする旧村境であり、景観的にも古代の郡境にはなじまないものがある」(62頁)として高座・愛甲郡境を特定していない。
 - 14) 平井紅峯『里のききがき』, 文芸出版, 1970。
 - 15) 伊藤 勇編集・出版『一村字限切図』, 相模原市相原・市川晴男氏蔵。
 - 16) 津久井郡城山町山本利雄氏蔵。
 - 17) 相模原市教育委員会蔵。
 - 18) 相模原市教育委員会蔵。
 - 19) 玉まほろば会古文書部会(代表・内田征一氏)管理。
 - 20) 1997年、この頂の直下から幅3m、長さ18mの前庭部を持つ単独の石積式横穴基(七世紀後半)が発掘され話題になった。また、頂付近から同時期の須恵器の大甕が発掘された。
 - 21) なお、道の交叉点である辻が異界との境界領域と意識された背景には、橋・峠・渚などと同様に、「陰陽が交叉するとき不思議な靈力が生れる」と考える陰陽説があると思われるが、これについては稿を改めたい。
 - 22) これらの伝承等については、相模原市田名の古老等、複数の地元民から直接教わったものである。また、井上正路『仰祖遺後—相原と二本松の昔と今』, 相原の歴史を探る会, 1989にも一部は紹介されている。
 - 23) 現在の一の鳥居から200メートルほど東に離れたこの地付近を、前掲13)も「古き史によると川尻の八幡宮はこの塚辺より即ち大門であったとか聞く。今以って大門畑とか大門前の言葉が残っている」(1頁)と紹介している。
 - 24) 前掲22), 163頁。
 - 25) 前掲22), 162頁。
 - 26) 前掲22), 100頁。
 - 27) ここで思い出すのは足利健亮氏が『日本古代地理研究』(大明堂, 1985)で平安京の四神について説いた中にみえる「玄武神社」の社地が三角形をしており、しかも氏はこれと船岡山を結ぶ軸線が一条通り・二条通りの計画方位と距離の基準となっていると指摘していることである(134~138頁)。
 - 28) 前掲5), 26頁。
 - 29) 垂水 稔『結界の構造—一つの歴史民俗学的領域論』, 名著出版, 1990。
 - 30) 『吾妻鏡』元仁元年(1224)十二月条から建長八年(1256)八月条までのあいだに八つほどの記事がみられる。
 - 31) イーファー・ツェン『空間の経験—身体から都市へ』, 筑摩書房, 1993, 36~37頁。ただし、ここでの議論は全体としては理念型のレベルに留まっている。

On the spatial function and the religious meaning of the places on the junction
of the three planned roads in pre-modern upper Sagami

MATSUMOTO Tsukasa

“TSUJI” in Japanese, means the crossing point of the roads, and in general, it seems to be a certain open space attached to the roads. Therefore, its function on the living space is the node itself, and it is notable that, in many cases, Tsuji have deeply related with the ritual activities held on the edge of the region. But we don’t have enough knowledge to discuss around the nature, especially about the location, the form and its formation of those “Tsuji” places. This paper will present a case study focusing on the relationship of the plane figure of those “Tsuji” places with their spatial function and religious meanings from the viewpoint of historical geography.

On the upper Sagami plain, before the 13th century, there had been laid the network of several planned straight roads named “Kamakura Roads”. And you can find small triangle parcels located at the points of the roads branching out into two. Those parcels, some of which are really called “Tsuji”, were shown on the pre-cadastral maps (made in the 18th or the 19th century), and seem to have been formed before the medieval era. On the branching point of the roads, which consist of one of the triangle corners, there are located the ritual objects, mounds, old and big trees, the temples and shrines, and so on.

The concluding remarks are as follows;

1. The nature of the “Tsuji” places can be seen also in the case of the branching points of the roads: the triangle parcels. And they seem to have been the original form of “Chimata”, old Japanese category similar to “Tsuji”.
2. The ritual objects on the corner of the branching, seem to have been formed as the landmarks of the straight roads planning. And as those roads have been functioned as the border lines of the village territories, those triangle parcels were kept as the place of the ritual activities held at the edge of the territory.

Key words: Tsuji, Chimata, junction of three roads, place of the ritual activities